

総科フレキャン・スタート！

さる5月1,2,3日、広島市青少年野外活動センターにおいて、「第一回総合科学部オリエンテーションキャンプ」(通称フレキャン)が、総勢300人の参加のもと行われた。昨年までの全学オリエンテーションキャンプの廃止にともない“広大一のオリエンテーションキャンプを”との意気込みのもと、75名の学生スタッフ、教職員、そして180名もの新入生の参加により、充実した3日間が繰り広げられた。

この体験をもとに、総科がより実のある学部として飛躍することを期待する。(編集委員会)



全学オリキャンから総科フレキャンへ

上小城 敬幸 (社会科学コース4年)

毎年恒例の全学のオリキャンが廃止となり今年からは学部行事として総科オリキャン(通称フレキャン)が実施されました。これまで20数回も継承されてきた全学行事を打ち切っての初の試みでした。とは言っても各学部すべてで学部オリキャンが行われた訳でなく、実施の有無は学部の事情に一任される、といったものでした。

我が総科では全学オリキャンが廃止となつた場合を想定して、約一年前から水面下で学部オリキャン実現の可能性について学生スタッフと教官の方間で協議を重ねていました。大学当局が全学オリキャン廃止の方針を決定した瞬間、総科は「広大一の学部オリキャンを創って見せよう」と学部行事としての旗上げを行ったのでした。趣旨と目的としては学問のオリエンテーションを行なうではなく新入生、在校生、教官、事務官みんなで総科の一体感を感じること、そして様々な人間関係を創るきっかけとする、ということでした。もちろんこれまでの全学オリキャンのメリットは最大限に生かすことも念頭に置いて企画に

あたったのです。しかし何から何まで初めてなので実施への道のりは困難の連続でした。全てのシステムを一から創らなければならなかったのです。学生スタッフの組織、教官との折衝、予算等の事務関連の調整などなど。しかし、この困難を乗り切ったのは半年も前から準備にあたった75名の学生スタッフの情熱や、学部長を始め多くの教官、事務官の方がたの御協力によるものでした。前代未聞の2泊3日、総勢300人の企画はまさにこの力と新入生の合作だったのです。学部行事としての総科オリキャンは学部のアイデンティティを感じることでオリエンテーションの意義はあったと思います。その一方で長年受け継がれてきた全学行事の灯が消えてしまったことに、とても複雑な思いがするのです。ここで生まれた学部の一体感をバネにして広島大学としての全体の一体感を感じることができれば、学生生活はもっと充実したものになるでしょう。そういう学生生活を送れたらと思います。

難産を乗り越えて実現したオリキャン

嶋屋 節子 (外国語コース教授)

平成5年度からオリキャン実施が各学部の裁量にゆだねられた。総科ではコース委員会が実施の可否を検討することとなり、昨年9月から委員数名が学生組織委員と話し合い、学生達の積極的な取り組みを確認した。11月下旬、コース委員会はオリキャンを平成5年度新入生向けの正式なオリエンテーション行事に組み込むことを決定した。

実施への道程でまず立ちはだかった難問は日程であった。教官側は1泊2日を学生側は2泊3日を主張し、互いに一步も譲ろうとしない。おまけに学生は、キャンプ場の都合で5月1日から3日までと連休のど真ん中に日時を設定した。しかし「学生の好きなようにやらせたら良いではないか」という意味合い



の優しい戸田学部長の言葉に教官側は全員たじたじとなり軍配は学生側に上がった。

年が明け西条移転でごったがえすなか、新しい教官組織委員と学生組織委員で企画の検討に入った。学部の正式なオリエンテーション行事である以上、背骨の通った企画が必要だし、学生がいつの間にか命名していた「フレキャン」、つまりフレンドシップとふれあいのキャンプの趣旨を生かすには全員で楽しむゲームも不可欠だ。結局、1日目は、午後、「わたしの総合科学部」と題して数名の教官がパネラーとして学問論を、夕方、「外から



見た総合科学部」と題して数名の同窓生の方に学生時代と卒業後の体験を語って頂くことになった。

さて2日目は無念の雨にキャンプファイヤーはお流れ、かわりにキャンドルサービスがフレキャンの頂点となった。晴れた3日目はオリエンテーリングで全員、裏山を駆けめぐり回り、キャンプ村の村長さんの学部長も大健闘、続く閉会式では「村長さん」の健闘ぶりに拍手が送られた。

かくして「フレキャン」は学生・教官・同窓生・事務官の触れ合いの場として、在校生の並々ならぬ努力によってその第一歩をスタートした。最後に、貴重な連休の一日を割いてご参加くださった同窓生の皆様、ありがとうございました。このキャンプは今後も続きますので、同窓生の皆様、この後輩とのふれあいの場に参加してくださいね。



フレンドシップキャンプ'93

石田 宣子（社会科学コース2年）

5月3日、オリエンテーリングを終えた後、班のみんなで昼食をとりみんなに一言の葉書を回したり、テント場の掃除をしたり……。いつこの時がやって来るのだろうか、なんて顔合わせ期間中よく思ったけれど、結構あっけなくやって来た感じがしてた。その後、閉村式が始まり、閉村宣言や代表者の言葉を班の一番前に座って聞いていた内に、さっきまで気が抜けたような感じだったのに、胸がいっぱいに息苦しいほどになっていた。

思えば、班の顔合わせの日、私たちフェローは大講義室の前でうろうろしていた。ここ2カ月、フレキャンの準備でスケジュール帳がびっしりで、みんな少し疲れぎみだったけど、そんなことも忘れてドキドキしていた。



わたしはフェローとして班をどう運営しようか、どう一年生と接しようかという問題に自分で答えが出ないままこの日を迎え、不安の方が大きかった。不安と緊張が混ざりあって、とにかく落ち着かなかつた。だけど、案ずるより産むが易しだった。それから2週間、一年生と一緒に遊びに行ったり衣装を作ったりしたけど、班を引っ張っていくのは私だけじゃなかった。スタッフのみんなも一緒に班を盛りたててくれたし、2週間目に入ると一年生が自動的に動いてくれて、私は“用なし”だった。本当にたくさんの人に支えられているのがよく分かって嬉しかった。閉村式の後のフェローコールで、総科コール、チクサクコール、ハイヅカ、安芸の国と次々にやつた。みんなで肩を組み、声を張り上げて歌つた。前夜のキャンドルサービスぐらい盛り上がつた。閉村式で胸にこみ上げていたもの、去年の10月の準備開始からの全部の思い出が噴き出した感じがした。胴上げされた後、自然と涙がでてきた。苦しかったことや楽しかったことも含めて、フェローをしたことによかつたと思った。そして、一年生が、このキャンプで感じた事以上のものを、来年新入生に感じさせてあげればと思う。

スタッフから見たフレキャン

森元 俊一郎（自然環境研究コース2年）

フレキャンスタッフの話が出たのは10月、ちょうど11月祭の準備の真っ最中だったようだ。ですからほぼ半年もスタッフをやっていた、ということになります。

この半年間、楽しかったこと、つらかったこと、良かったこと、嫌だったこと、色々ありました。一番嫌だったことは時間をとられたことです。週2回の会議に、何かの講習会、リハーサル・キャンプ、また新入生歓迎行事



に足をつっこんでいたこともあって（実はそっちのほうが大きい）当初立てていた自分の予定が覆されることがたくさんありました。とはいっても、結局自分がそれらのこと（主に遊びの計画ですが）よりも、フレキャンの方を選んだということで、終わってみて満足してるのだから、それで良かったと思っています。当時とその後のフレキャンに対する意識の差ではないかと思います。

楽しかったこと、良かったことはたくさんありました。親睦会ではそのものが楽しかつた

フレキャンに参加して

里村 多香美（1年）

合格後にもらった資料の中に、「総合科学部オリエンテーションキャンプ」と書いてあった。何だろうと思って開いてみると、どうやら、先輩、教授とともに行くキャンプがあるらしい。去年の体験談を見ると、とても面白そうだ。そう思って何となく申し込んだキャンプだった。

入学後、花見・新歓と、たてつけに行事があって、先輩方の勢いに圧倒されつつも少し総科の雰囲気になれてきた頃、顔合わせ。



たわけですが、仕事をやっていく中で、横のつながりが広く、より強くなったり、先輩方と知りあえたことなどは半年間を通して得られたものです。

そしてスタッフが班にも入ったことは、自分にとって大変大きかったです。05生と知り会えた上に、班内のスタッフ、フェローとは特に強い関係が結ばれたと思います。自分の部屋を提供してそこに集まつたりして、つまり班に入ることでスタッフという裏方だけでなく、参加者としてフレキャンを見る目ももてたのではないか、と思うわけです。

閉村式後、たくさんの涙が見られたのですが、その中に05生の涙もあったこと、さらにその時、自分の居る班の05生が「来年絶対スタッフやりたいです」と言ってくれたことは、すごく嬉しかったです。来年スタッフ又はフェローをやりたい、という言葉は、その後他のところからも聞きました。ぜひ、がんばってやってみてくださいね。



最初はみんな緊張していたのか、初めて逢ったものどうし、あまり口もきかず、こんな風で大丈夫なのかと思った。が、それも束の間、今ではあの時の状況がおかしくらいみんな仲良くなっている。二週間に及ぶ準備の間、何度も集まり、いろんなことを話しながら、やっと迎えたキャンプの当日。その日は雨だった。趣向を凝らしたそれぞれの仮装。前日遅かったので正直言って眠かった、先生方とのパネルディスカッション。廊下中にギュウギュ

ウになりながら、一度に多くの人の名前を聞きすぎてわけが分からなかったウォームファジィの交換。雨でキャンプファイヤーが中止になって残念だったけど、本当に感動したキャンドルサービスとファイヤーダンス。



オリキャンに参加して

中山 広明（人事係）

私は人事係ですので、本来オリキャンに参加することはあり得ない人間だったのですが、4月から広島事務室で勤務しており人事の仕事より学務系、とりわけ厚生補導の仕事に従事する機会が多くなり、オリキャンにも参加させていただくことになりました。私の出身大学では、学部単位の大規模なオリキャンなどなかったので、広大のオリキャンがどの様なものか大変興味があったわけですが、そこで見たオリキャンのノリとは、まさにJリーグのサポーターのノリでした。班ごとにおそろいの衣装は作るわ、ビハデなメイクはするわ、それはもうミラクルな（ユーミン風）光景でした。

このオリキャンの良い所は、ただ大騒ぎするだけでなく、参加している全ての人が「自分たちで」やるという考えを持っているところだと思います。もちろん、半年も前から自分の時間を割いてまで準備を進めてきた上級生のフォローなしにはこのキャンプは語れませんが、各自が自分の役割を考え率先して行動していく雰囲気が新入生の中にすでにできていたのには感心させられました。

さて我々の方はと言うと、スポーツ大会や

「夜通し語る。」と、言いながら、半数が寝ていたテントの中。地図と違っていてちょっともめてしまったオリエンテーリング。とにかくたびれて全員が寝ていたバスの中。みんなで飲んで、歌って、踊って、楽しかった打ち上げ。新天地公園でのハイズカ。

すべてがあっと言う間に過ぎていった。忙しくて大変だったけど、本当に楽しかった。途中、悲しいことも起こってしまったけど、私たちは決して忘れない。

フレ・キャン。こんな時間を持てたことは私はうれしく思う。総科で良かったと思う。来年もこのキャンプに参加したいと思う。

最後に、フェロー及びスタッフの皆さんお疲れさま。

キャンプファイヤーを楽しみにしていたわけですが、あいにくの雨でメインイベントが流れてしまい、学生さんが一生懸命作ってくれた食事を食べることに終始していました。「先生（学生から見たら我々も事務の先生なのでしょうか）どうぞ」と笑顔で食事をすすめてくれた時と、閉村式の挨拶で学部長から「お世話になった事務の方にも拍手を」とお言葉をいただいた時には、何と肩身の狭い思いをしたことか……。

そんな悪天候にもめげず日程を終えて、最後のファイヤーダンスで可部の山に雄叫びをとどろかせていた時、彼らは本当に輝いて見えました。学生さんていいな、広大生っていいなと素直に思えた2日間がありました。



夢—現実そして夢

安仁屋 宗正（外国語コース助教授）

高校時代、青春の真っ只中のある夏の暑い夜、ハンパ者、劣等組、いわゆる不良学生と呼ばれる友人達と共に話のわかる担任の自宅へおしかけ酒を飲んで人生を語り合った。その時、私は「人生には目的が無いから自分で目的を創りださなければならない。」と豪語したことがある。あれから20数年未だにあのときの言葉を追いかけてあの言葉に追いかかれている。

博士課程を終了し論文も最終段階を迎えた頃、シアトルにあるUWの霧雨の中の森のようなキャンパスを3階のアパートのベランダから見下ろしながら、私は、こじんまりとしているが落ち着いた研究室で窓の外の木々を眺めながら思索している、経済的に安定した地位にある専任教官の自分を夢見ていた。ところが、学位を取得して故郷の沖縄に帰った私を待っていたのは、文字通り日々の糧を得るために複数の大学で時間給で働く非常勤講師の仕事であった。経済的な余裕と、研究のための十分な時間が最大の夢であった私は、就職活動に乗り出した。採用されることはず無いだろうと思っていた広島大学総合科学部が幸い私を拾ってくれ、約1年間で非常勤講師とおさらばとなった。広大と言えば一応名の通った大学である。国立大学なので研究の時間は十分確保されるであろう、それに人並みに生活できるだけの給料は貰えるだろうと、自分の都合の良いように考え喜々として沖縄を離れた。あれから5年になる。経済的にはまあまあ満足している。が、最近は次から次へと矢継ぎ早にくる雑務、また会議の連続で研究の時間がほとんど無い。そろそろもう一つの節目に来たようだ。新たに夢を創りださなければならない。

☆

話題を学生のほうに移そう。学生のマナーの欠如について一言も二言も言わせてもらいたい。最も気に入らないのは、授業中のお喋

りである。これはアメリカの大学では考えられないことである。お喋りをして迷惑な学生は、教師ではなく他の学生が「Shush! 或いは You, shut up!」とマナーの悪さを指摘するのである。次に困るのは居眠りである。授業中、再三注意しても平気でだらしなく眠るのがいる。私が大学生の頃は、一度注意されたら「眠気をさます為顔を洗いに行ってもよろしいですか。」と許可を求めたものである。また、欠席についても然りである。3~4回無断欠席をし「どうにかなりませんか。」と泣き付いてくるのがいる。勿論どうにもならない。私も授業をサボり、映画やビーチに行ったり、本屋を物色しに行ったりした。しかしそれは自分の責任においてやったことであり、弁解がましいことは決して言わなかった。

一体全体最近は、やる気のないように思われる学生が多い。全国的な傾向らしいが、大学は将来の目的が無い或いは目的が定まらない学生、別にやることが無いからさしあたって入学した学生、漠然と教養を高めたい学生、親が行けというから來た学生などの溜まり場になっているようだ。目的が無ければそれを創りだし、目標が定まらなければあらゆる可能性を探り実現してゆくことに努力してもらいたい。何かを学び取ろう、自分を高めよう、己を鍛えようという強い意志を抱いている学生にとっては、日々の授業の断片、関係がないむだだと思われる設問・宿題、或いはどんなに小さい役に立たないと思われる日常茶飯事からでも何か重要なものを引き出し、見つけだすことができると思う。学生とは、正に学ぶことに生きるのであり、生きることを模索する時期の若者ではなかろうか。

夢を抱いてもらいたい、目標を高く持つてもらいたい。夢を目的を実現するため可能性を探り日々努力してもらいたい。夢は破れても良い、潰されても構わない。また新たに創りだせば良いのだから。

大陸移動説と固定・常識観念

早瀬 光司（自然環境研究コース助教授）

1915年、ドイツ人気象学者アルフレッド・ウェグナーが「大陸と海洋の起源」を出版し、「大陸移動説」を唱えた。これは、大西洋の両側の海岸線の凹凸がよく合致することに気づいたことから始まったものであった。しかし、彼も世の中の大半の人と同じく、「最初、それはとても本当とは思えなかった」と述べている。

だが、その後、ウェグナーは様々な分野の研究例を調べていくうちに、「大陸は動いた」「大陸は動いている」という考えを基本的に正しいと思うようになった。ウェグナーがそう思うようになった具体的な事例としては、地球物理学的に、大陸塊をつくる物質は深海底をつくる物質よりも軽くて、そこに浮かんでいるとするアイソスター論を基に、「陸橋説」の批判からはじまり、古生物学的には、現在深海にへだてられている二つの大陸上に同一種の陸上動物や植物の化石がよく出現することとか、地質学的には、アフリカとブラジルの片麻岩台地がよく似ていて、相互に連続していることとか、古气候学的には、3億年前の大陸氷河の跡がアフリカ南部、南アメリカ、オーストラリア、インドに分散していく、各大陸が移動したと考えないと当時の極の位置が求められることとか、非常に多くの例があげられて、考察されていた。ウェグナーが多くの学問分野を踏破し、これを総合して得た結論の「大陸移動説」は、まさに総合科学そのものであった。

しかしながら一方、当時の世界の学者達の圧倒的多数は、大陸移動説を全く受け付けなかつた。「大陸移動」という考えは、当時の常識から外れすぎていたので、人々はウェグナーの論拠をまじめに聞こうとはしなかつた。当時に限らず、まじめに聞こうとしない人々は、いつの世にも存在している。しかし、「常識と異なる」というだけで聞こうとせず、考え方ともしない研究者たちばかりではなく、常識と異なることにも耳を傾け、これを

認め、発展させようとした人々も、ごく少数ではあるが存在した。だが、1930年ウェグナーは探検隊長として、グリーンランドへ出発し、そこで遭難してしまった。彼の死後、20年間大陸移動説はほとんど忘れられてしまった。しかし突然、1950年代になり、岩石磁気の研究（古磁気学）によって、大陸移動説は蘇ることになった。今日、大陸移動（説）は広く認められ、プレートテクトニクスとして発展している。

ここで思うことは、「大陸が動くはずがない」という「常識観念」です。当時の学者の大半が、この「常識観念」の呪縛から逃れられなかつた。当時に限らず、今の世の中でも同じかもしれません。すでに思い込んでいる「固定観念」のため、なにか大事なものを、調べようともせす却下していることがないでしょうか。

さて、研究と教育は「大学」におけるその両輪と言われますが、ほんとうは、どちらに重みがあるべきでしょうか？ 現在「大学」には様々な風が吹いています。これを機にその「固定・常識観念」や「思い込み」を吟味し、「大学」の真目的を探ることは可能です。「大学」は未知のものに挑戦することには得意のはずです。前例も大事ですが、前例に捉われることなく、自在に発想し、ものを見極め、総合的、徹底的に掘り下げる所以のできる「場」としたいです。また、互いに通じ合える、心温かな「場」でもあります。そのような「場」に学生を迎えて、一人一人を活かすことこそ「大学」の本望ではないでしょうか。

さきに開かれた一般教育研究会で、「大学は全てを研究してきたが、自己だけは研究してこなかつた」という報告がありました。現状の「大学」に対する「固定的な見方」を振り切り、新しい「大学」のあり方を模索し、「自己」とその「固定・常識観念」に光を当てみたいものです。

楽しかった20年

大田 素子（物質生命科学コース事務補佐員）

ほこりが長いひものように見えた時、思わず手を持ってみた。「やっぱりほこりか。」この情景をきっと忘れないことだろう。

住み慣れた千田キャンパスから西条キャンパスに移り、今やっと以前の落ちつきになってきた。狭いとか、きたないとかよく耳にしたものだ。きっとあの建物であったからこそ経験できたことが沢山あった。

私の机は実験室の片隅に置いてあり、いつも賑やかな学生の声を聞いていた。勤める前に「薬品の臭いで気分が悪くなることはありませんか。」と質問をされ、「大丈夫です。」と答えたものの、その場にずっと居続けることに不安もあったが、「やってみたいという仕事を得たのだ。」という気持ちが強く音をあげないことを心にきめた。

短大で食品学実験という科目があり、その授業がこの仕事を選ぶきっかけとなった。毎日実験室の隅で講義を聞き実験方法を見ていると、大部分の事は理解出来た気分になるのが楽しくて、もう少し奥に入り込んでみたいと思っている間に10年が過ぎ20年が過ぎていた。「化学」という学問に興味があったのではなく「滴定」という操作による食品の分析」という動作をいつか仕事にしてみたいという目標があったのでついつい長居をさせていたいた。この目標を追いかけている間に思いもかけない経験をさせてもらった。

それは多くの人との出会いだ。教養部から総合科学部に改組され、専門の学生が教官室に入った頃、それまで静まりかえった建物が24時間稼働の建物に変化していた。何か異様な雰囲気でもあった。あちらからもこちらからも顔々、時には寝泊まりしている学生もあり、開け放しの部屋に朝の氣味悪さも覚えた。

この雰囲気の中から親しみが湧いてきたのはどのくらい経った頃だろうか。私のこと、弟や妹を得た気分になってしまい、物事がわかっているような顔をして、相談にのることもあり、又忠告もしてしまった。この様なことを繰り返している間に、「コピー用紙が無くて。」と電話てくる学生、久し振りに来校し、「来ても淋しいからずっとここで働いて下さい。」と言ってくれたり、又結婚式の招待状を送ってくれたり、私を頼っていてくれたのかと思うと、うれしくてつい幸福感に酔った。

もう一つ忘れない経験、それは留学生のお世話、ことばが通じ合わないもどかしさ、伝えたいことの3分の1しか理解してもらえない、落ち込んでしまったり、又心と心でぶつかり合って気持ちを伝えたこと等、これから時代を生きる糧を得た思いがしている。タイからの留学生が帰国を前に、食事に誘ってくれた。行ったところは、焼肉の店、とても女性2人で行くようなところではなかった。食事を終えた時、おかみさんらしい人が「よく頑張ったね。元気でね。又日本において。」と別れの言葉を言っておられ、彼女はこの温かさを求めてこの店に来ていたことを知り、心と心のつながりの大切さを改めて知ることができた。いつか彼女の国タイを旅行してみたいと思っている。

好奇心のかたまりであるため、いつも自分らしさを求めている私にとって最高の職場であった千田キャンパスにいつ迄も思いを寄せていても、過去は戻ってこない。この西条キャンパスで自分らしさを求めて素晴らしい職場にしてゆきたいと夢を追い続け列車に乗っている。そして沢山の経験させていただいたことを感謝しつつ。

大学院生となって

徳留 善幸（生物圏科学研究科M1）

この春、大学院に入学したわけだが、大学院の入試が行われたのは去年の9月前半。その2週間前に私は何をしていたかというと、8月20日から31日まで富士山にある建設省富士砂防工事事務所で実習をしていた。院の試験があるというのに、よりによってせっぱ詰まった時期に富士山で実習をしてはたしていいものだらうか悩んだ結果のことであった。ところが、富士山で私が見たものというと、全てが桁外れに大きい、自分が体験したことのない世界であった。

私は、総合科学部4年生の春、砂防学研究室に入って以来、その夏まで机上での研究まがいのことはやってきたが、結局その富士山の大沢崩れが初めてのフィールドということになった。日本最長のスーパー砂防ダムや大沢崩れの源頭部の崩落の険しさ、降雨に伴う土石流が堆積している溶岩を削り取った跡など、一般的な富士山の美しさからは想像しがたいものを実際に目の当たりにすると自然の猛威から人命を救う砂防、そして自然の厳しさ、優雅さなどが自分の体で体験できた。その体験は大学院の受験勉強だけでは得られないほど有意義なものだったとおもえる。

それから現在に至るまでは、鳥取県の大山や広島県加計町での調査、室内実験として一面せん断試験を行っている。大山というと学部2、3年生が夏から秋の時期に行く野外実習地としてよく知られている。昨年の9月末と11月上旬に私たちは、その大山に行ったわけだが、ちょうど紅葉の盛んな季節と積雪が少しずつ見られるようになる時期と重なって、紅葉や雪、そして大山から見おろす風景を楽しみながら調査を行なった。行く度にその様相が変わり日々に見ても少しづつ何かが違う、そういう自然に親しむ機会が与えられたことは幸せであり、機会を与えて頂いた砂防学研究室に感謝している。

私の所属している砂防学研究室には現在学生は私一人しかいないが、過去の先輩達の中

には個性の強いユニークな人が多く、特に研究や調査に関して熱心な取り組みを聞くと、私がそういう伝統ある研究室に入って、いま自分がどういう状態かを考える。すると、先輩達の偉大な業績に対して何事にも積極的にやっていない自分に腹が立ち、努力不足を痛感する。また、昨年から指導を賜っている海堀正博先生の意向に添えないことが多い。海堀先生は以前、飛翔に大学生と大学院生との立場の違いを書かれている。そこには、大学院生となると自分の専門分野の研究を深め、何事にも厳しく対処し、また対処される、となる。大学院生となって3ヵ月いま自分はその立場に苦しんでいるのであろうし、当分悩み続けるだろうと思う。



目指せ！ 山頂

自分の専門としている砂防学であるが、実はほんの2年前に、この学問の名前を知ったのである。現在は若干、砂防の意味が分かりかけた程度であろう。しかし、「砂防学」という学問の道に入って1年経ったばかりであるが、大学院生になって、どの学問もそうであろうが、やればやるほど奥の深い学問であることが解るようになった。砂防学は土質力学、水理学、水文学、応用力学、林学等、私が挙げただけで、これだけの分野に多岐している。3年間フィールドで自然を見て多くの専門書を読んでも、その全ては把握しきれない。しかし、大学院生となって、今後この研究室に入ってくる後輩たちと共に、この研究室に新しい色がつけられて、さらに自分が2年後確かな自信をもって卒業していることを切望する。

大事にしたいきっかけ

藤井 恵美（1年）

私が高校の頃、最も苦手としていたのは家庭科、それも調理実習であった。なにしろ、それまで全く家事というものをしていなかっただため、班員に迷惑を掛けまくった。詳しく書くと、それだけで与えられたページを終えてしまいそうでやめておく。そんな私であるから、西条で独り暮らしということになり、どんなに不安であったか想像していただけるだろう。近所にコンビニはない、家賃が高い分生活費が減る、いかに私でも自炊せざるを得なかった。

ところが現在、私はしっかりと生活している。それどころか、料理のおもしろさに目覚め、毎日弁当まで作っている。人間、どこで変わるかわからない。要は「きっかけ」なのである。

「きっかけ」というやつは、いつも突然やってくる。外からであったり、自分の中からであったり。生活の中には、そんな「きっかけ」が多く存在している。だが大半のものは気付かれることなくどこかへ去っていく。だが、運良くある人に発見され、その人の心の一部となってずっとそこに存在し続けることもある。

自炊の
すすめ



る。

ところで私は非常に飽きっぽい。この言葉は、通常欠点のように用いられることが多いが、私は少し違った考えを持っている。自分の中からの「きっかけ」、いわゆる興味といふやつに正直なのだ。だから、一つの事を行っていても他の興味が湧いてきたらそちらへ移る。結果、長年心底打ち込んできたものはない。

しかし、私はそれでいいと思っている。確かに一つのことに打ち込むのもいいことであるが、世の中にはたくさんのものが存在し、それぞれが違った光を放っているのだから、それらに触れるだけ触れたらいではないか。そうやって多くの経緯を経て、また同じものに戻ってきたら、以前とはまた異なる接し方ができるだろう。そのほうが二倍得した気分になれると思う。

そういう意味で、大学生活は多くの「きっかけ」に触れる機会に恵まれている。この四年間で一体どれだけ新しいものに接することができるのか、非常に楽しみにしている今日この頃である。

Pさんの告白

—自信→悩む→ふっかかる→?—

篠崎 陽平（1年）

憎めない青年Pは三角関数が好きだ。といつてもPは三角関数を数学の問題を解くのに使うことはめったにない。その使い方はもっと奇想天外だ。Pは世の中を捉え、また自分の生き方の交通標識としてつかうのだ。例えば時間の使い方にに関して、規則的・計画的になりすぎてマンネリ化してきたなと思えば、あえて無規則的・自由に生活するというふうに考える（図1）。

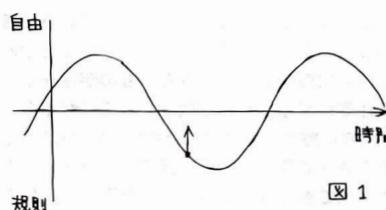


図1

Pはこんなふうに暮らしていたので大きくつまずくことなく2ヵ月がすぎた。でも、そのうちPの捉え方もうまく機能しなくなった。つまりPは何をすべきか？矢印はどこにあるのか？どっちへ矢印を向けるべきか？ということが分からなくなってしまった。それでちょっと憂鬱なPだったが、ふとこの状態に至った原因を思いついた。たぶん水島先生やフレディ・マーキュリー（エイズで死亡したロックミュージシャン）など偉い人のようになりたい、それにはそれらしく行動をしなければならないと思っていた。

考えた末Pは1つのことに気づいた。自由一計画のようにして生き方をきめるやり方（図2）には、両端の2つの言葉だけでなく、この矢印を動かす自分が登場するのだ。つまりPの憂鬱は矢印を動かす自分を見失っていたためだったのだ。これ以後Pは他人のまねをしようとせず自分なりに生きようと決め、改めて自分のやり方に自信を持つことができた。うまくいってない時も自分の捉え方は奥深い

ところでちゃんと機能していたのだ（図3）
と得意になっていた。

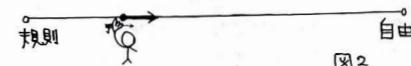


図2

ところがPの脳裏にはある言葉が浮かんで消えつつしていた。その言葉は「流体的思考」。これは今までの自分の世界の捉え方を「建築的思考」と呼び、「流体的思考」とは相対立するものらしい。これは中沢新一の「雪片曲線論」によると「ものごとの統一的な理解をもたらす超越的な立場から出発するのではなく、存在のオートノミー（自律性）の側から世界の多様性を見ていく生き方。ものごとの背後には何か隠された意味があると思い込んで、自然発生的な意識の働きをどこかに根づかせようとするのではなくて、あらゆるものごとがどこまでいっても根にたどりつくことのない表層であることに気づいて、そういうものとして受け入れることのできる素直さ。」ということだそうだ。Pはこの考え方の一応の理解を示しているが実行はしていない。でもあと数ヵ月したらPの考え方は変わっているかもしれない。三角関数も嫌いになっているかもしれない。

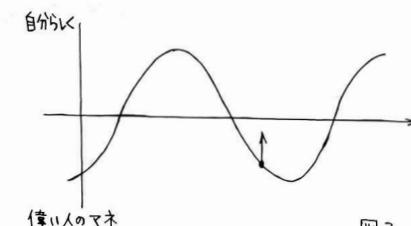


図3

西条にきて思うこと

村上 とよ（1年）

私達が広島大学総合科学部に入学してから早三ヵ月以上が過ぎた。振り返ってみると合格発表が始まって、それまでには考えられなかったような、様々な変化があった。

まず何と言っても、私にとって一番の変化は一人暮らし始めたことだろう。家族と一緒に暮らしていた頃は、大学生になったら一人暮らしをしようと心に決めていた。このことは、自宅と離れたこの大学を選んだ理由の一つでもある。その頃は、夜遅くまで自由に外出できるとか、部屋のインテリアはこんな風にしようとか、一人暮らしの楽しい面しか頭になかった。しかし、実際、一人暮らしを始めてみて、自分の考えの甘さがつくづく身にしみている。当然のことだが、炊事、洗濯、掃除をすべて一人でこなさなければならない。掃除、洗濯はまだいいとしても、私にとって今一番の課題は炊事だ。炊事に関しては、自分のいい加減な性格を改めて思い知った。朝、晩きちんと食事を作って、その上昼にまでお弁当を作ってくる友達を見ては感心するばかりだ。今まで自分がいかに家族に頼っていたかがわかって、そのありがたさを実感している。特に体の調子が悪い時はなおさらである。

あとひとり暮らしとは関係ないが、新生活の誤算と言えば、住居を大学より南側に決めたため、近所に店がほとんどないことだ。原付を持っていない私としては、食料品の買い物に始まって、色々と苦労をしている。夜などに、ちょっと何かが足りないなという時、気軽に買い物に出られないのがつらいところだ。雨天の日も色々大変だ。バスで大学に行こうとしても、本数が少ないため、授業の開始時刻と合わないのだ。せめて一時間に二本バスがあればと思う。

しかし、今の生活も結構楽しいものだ。以前から考えていたような、一人暮らしの楽しさはもちろんある。その他にも、友達と一緒に夕食を作って食べたり、泊まりに行ったりなどの楽しみもできた。また、西条は本当に星が綺麗な所だ。晴れた夜に自転車のペダルを踏みながら、何気なく空を見上げたとき、文字どおり、満天の星を見る事ができた。

それから、たくさんの友達ができたこともうれしいことの一つだ。しかも、高校までと違って、全国各地から人が集まっているため、土地によって様々な個性があるのがとても面白いと思う。その一つが方言だ。今まで自分が標準語だと思っていた言葉が、実は方言だったことがわかったり、友達と話していると、毎日新しい発見があって面白い。

合格発表の日から、下宿探し、新生活への準備、入学式、フレキャン、大学祭プレ企画など様々なことがあった。けれども、今までの数ヵ月間は、私の印象としてはとても短かったような気がする。あっという間に夏が来たなと言う感じだ。これからも、まだまだ新しい発見と出会いがいっぱいの大学生活が待っていると思う。これから的生活で、自分がどんな風に変わっていくのか、今からとても楽しみだ。

坂のフレキャン

